

〔研究論文〕

文学(者)と思想戦——第一回大東亜文学者大会の修辞学・補遺**松本 和也**

〔Article〕

Literature and the Thought Fight**Katsuya MATSUMOTO****Abstract**

In this paper, the relationship between literature and ideological warfare is considered through the analysis of the articles during the war.

Since the beginning of the Pacific War, the domestic whole power warfare system was arranged and the importance of ideological warfare increased. Under the era, the literary personnel was expected to work at the ideological warfare.

First, we analyzed how the importance of ideological warfare was debated in wartime. After that, we conducted the discourse analysis on related articles about the 1st Writers Meetings of the Greater East Asia.

Many of the statements affirmed the Great East Asia War while hoping for the prosperity of the Greater East Asia Co-prosperity Sphere. However, some cracks were also found in such statements.

1. はじめに——思想戦としての大東亜文学者大会

文学(者)の思想戦という問題領域を遠望しつつ、本稿では《日本勢力範囲下の文学者たちを糾合し、日本を盟主とする大東亜共栄圏の建設や大東亜戦争の遂行に如何に協力するかを議論する場》¹と評された第一回大東亜文学者大会(S17.11.3～9)について、本会議の言説(言表-修辞)を中心に分析した前稿²を補う意味も含め、紙幅の都合等で検討対象にできなかった言説の分析を行う。そのことによって本会議前後-周辺の言説までを視野に収め、第一回大東亜文学者大会をめぐる言説の歴史的な把握に努めたい。大東亜戦争と大東亜共栄圏³との関わりをよく示し、第一回大東亜文学者大会をめぐる支配的な言説の範型ともいえる言表として、第一回大東亜文学者大会初日、開会式の最後に横光利一が朗読した、次に引く「大会宣言」(引用は『日本学藝新聞』S17.11.15)がある。

大東亜精神の樹立並にその強化徹底を期してわれ等茲に根本を論じ、緊急の課題を議し、不動の信念を確立し得たるは真に欣快に堪へざる所なり。惟ふに大東亜戦争の勃発はわれ等東洋の全文学者に根源よりの奮起を促し東洋再建の牢固たる決意を齎したり。これ実に日本の乾坤一擲ともいふべき大勇猛心の然らしめし所なり。われ等光輝ある東洋の伝統に心を開き祖先が靈魂の叫びを継ぎ、久しきに互る忍従と混迷の境地より誓つて再生せんことを期す。東洋新生のための礎石は置かれたり、われ等が心魂固く一致せり。今や大無畏の精神をもつて邁進する事

を一切の敵国に告げん。凡そ文学と思想の問題は強烈なる信念と永きに亘る刻苦とによつて処理さるべきものなり。われ等永久に本大会の感銘を心にとどめ温かき信愛の下に東洋の大生命を世界に顕揚すべく鋭意実行を期す。しかしてこれが成否はひとへに大東亜戦の勝利にかゝれり、全東洋の運命もまたこの大戦の完遂にかゝれり。われ等アジアの全文学者、日本を先陣とし、生死を一にして偉大なる日の東洋に来らんがため力を尽さむ。右宣言す

昭和十七年十一月五日 大東亜文学者大会(14面)

ここから読みとれるのは、敵国(米英)に東洋が一体となって立ちむかい《東洋新生を期す》、もとよりその成否は大東亜戦争(の勝利)にかかっているが、《われ等東洋の全文学者》も《文学と思想》という局面において積極的な貢献を果たしていくべきだ、という理念であり、すなわち大東亜戦争-大東亜共栄圏成就のため、《われ等アジアの全文学者》を思想戦へと動員する支配的な言説でもある。もとより、帝国日本を中心とした同大会に、次のような偏向があったことは疑い得ない。

大東亜文学者大会は、大東亜共栄圏なるものの内部で平等に発言したり議論したりする場では決してなく、帝国の文化・言論・文学・思想を統制する海軍報道部長・陸軍報道部長などが見守る中、植民地・占領地の代表が日本語で新体制秩序や帝国の戦争に協力することを決意・誓約し、これを集団的に告白することによって、自ら帝国の秩序を宣伝する「媒体」となるべく自身を錬成する過程であったと考えられる⁴。

従って、《大切なのは、「参加した」(作家)か「参加しなかった」(作家)かという、「大東亜」や文学者大会を成り立たせたシステムの問題(歴史性)を度外視した無の弁証法ではない》、《参加してしまった場所という実現世界のフィールドに、弁証法では解消しえない傷痕のように刻まれかつ残されつづける矛盾と困難の境位、を見つめること》⁵だという指摘がなされるのは至当ではある。

ただし本稿では、前稿同様に、言説のメッセージ内容やそれに関わる主体性よりも、言表-修辞に注目する。たとえば、第一回大東亜文学者大会閉会后、青木三六「文学の宿命——大東亜文学者大会を顧みて——」(『新作家』S18.1)において、《大東亜文学者大会の時代的意義を認めるのに吝かではないが、テーゼの声明に終始したかの観のある大会に甚だ嫌らぬものがある》(8頁)という勇氣ある批判がみられたが、本稿が目指したいのはむしろ《テーゼの声明》=言表-修辞自体に刻まれたさまざまな認識や亀裂、それらと支配的な言説との差異/同一性だということになる⁶。

なお、第一回大東亜文学者大会をめぐる言説を、より歴史的に把握-理解するためにも、対米英戦開戦以後、一挙に本格化した思想戦をめぐる議論⁷も、文学(者)という観点から併せて検討していく。何より、第一回大東亜文学者大会において文学者は思想戦の戦士と位置づけられ、そのことによって社会的有用性を担保されてもいたのだから。もとより、ペン部隊に端を発し、日本文学報国会へと至る文学者団体の理念・活動もまた、大東亜戦争-思想戦と密接な関係をもっており、大東亜共栄圏を視野に入れた大東亜文学者大会とは、文学者による思想戦の戦場-前線でもあった。

2. 思想戦をめぐる文学者と文学団体

対米英戦開戦以後、総力戦が盛んに喧伝される中で、銃後における文化(人)の役割が再認識され、戦場など外地での文化工作⁸のみならず、情報局や陸海軍の軍広報部において思想戦を重視す

る動きが顕在化していく。《国家総力戦における肝腎は、実に思想戦》だと断じる鹿子木員信「第一線 総力戦中の思想戦」(『読売新聞』S17.7.17 夕)において明示された通り、大東亜戦争が総力戦であるという認識に伴って思想戦の重要性は増し、《大東亜戦争の秘訣は、透徹せる思想戦の敢行にある》(1面)とみなされていく。しかもそれは、文化的な視野(の広さ)を許容することのない、断固たる姿勢で進められていく。そのことを示す、1942年初頭のやりとりを例示しておく。この発端は、次に引く板垣直子「戦時下日記抄 文化の役割」(『朝日新聞』S17.1.27)にあった。

米英の東洋侵略はもとより倒さなければならぬ。しかし、かれらの文化にまで眼をとぢることは許されない。日本の発達も米英をも一つの踏台に使つて成つた。今後もその原理は変るはずのものではない。〔略〕大東亜戦争を境として新日本を建設してゆく仕事が重大であればあるほど、文化的には広い視野を保ち、違ふ民族からよいものをうけることだ。文明国は皆それをやつてきてゐる。(4面)

これに対して、昭和16年10月より東条英機内閣時の情報局次長(S18.4、依願免本官)を務めた奥村喜和男がすぐさま「旧秩序の撃滅へ 大東亜戦争の文化戦線」(『朝日新聞』S17.2.3)を発表する。《今時の大東亜戦争は、それが世界新秩序建設戦争なるに鑑み、単に米英にたいする武力の戦ひであるのみならず、政治、経済、文化等すべてを挙げての国家総力戦であることは多言を要せぬところ》だとする奥村は、上の板垣発言にふれて《今次聖戦下において断じて許すべからざる言辭といはざるを得ない》と批判し、《今次の戦争が、かゝる米英旧秩序に対する全面的闘争を通じて、正義に基く世界新秩序建設のための、大なる文化創造戦争なることは論を俟たざるところ》で、《赫赫たる武力戦の遂行とともに、思想戦にあつても亦益々その完璧を期せざるべからざるのときに当り、かゝる言動は厳に戒めなければならぬ》(4面)と、厳格で徹底的な思想統制を展開する。

すでに、それぞれのかたちで国策への協力を求められてきた文学者ではあったが、昭和16年末の南方徴用⁹以来、現実的かつ本格的に思想戦へと動員されていくようになる。《思想戦の意味が日本の文壇に理解されるためには、大東亜戦争を必要とした》と指摘する無署名「文芸手帖 思想戦について」(『文藝』S17.9)では、《十二月二十四日に開かれた日本文学者愛国大会は、各員の意識に於ては兎も角、主催者側の精神とその形式に於て、思想戦の先駆であつた》(115頁)と前年末の契機が振り返られている。昭和16年12月8日の対米英戦開戦をうけて、12月20日には大政翼賛会文化部の幹旋で、大政翼賛会会議室にて文学者愛国大会が開催される。そこでの決議に即して、《17年2月初めには散文関係者が翼賛会に集つて、名称を日本文学者会にすることなどを討議し》、《その後、名称は日本文学報国会になり、5月26日に創立総会を開き、6月18日に東条英機首相や谷正之情報局総裁を招いて発会式を行った》¹⁰というのが、日本文学報国会へと文学者が統一されていくまでの経緯である。無署名「文壇余録」(『新潮』S17.2)では、文学者愛国大会の開催が《文学者としては実に空前のこと》(24頁)だと評された上で、《文学者愛国大会が開催されたのを機縁として、新しく総合的な文学者の団体が組織され、それが官憲側ともよく接触して、常に意志の疎通を計り、文学者も何時でも活発に時局的な活動が出来るやうに準備しておくことは、特にこの際の喫緊事である》(26頁)とされていたが、ここでいう《団体》は日本文学報国会、《活動》は思想戦を指す。従つて、日本文学報国会主催による大東亜文学者大会は、名実ともに思想戦に他ならない。

『日本文学者会』ができて自分も出席した」という武者小路実篤は、「武者小路実篤に訊く 文学への愛情」(『日本学藝新聞』S17.3.15)という記事の中で、次のように発言している。

みんな一生懸命になつて日本のことを考へ日本の文学を立派にしようと考へてゐる。しかし、日本的といつても決して狭いものではなく、アジア的、世界的な文学でなければならないのはもちろんだ。殊に南方諸国の民族に日本を知らせるためにはもつともつとほんとの文学が必要だと思ふ。読んで日本を尊敬できるやうな文学が必要だと思ふ。幸ひ情報局や翼賛会には、文学に理解のある方達が^(欠字)大勢居られるが、『日本文学会』もかうすればいい文学ができる、といふプランをいい空気□作つて行くことが必要だと思ふ。いい文学を生むためには、いゝ空気がなければ駄目だ。そして、なぜ文学が書きたくなるかといふ気持ちを偉い方達に解つて貰ひ、文学の持味、文学の力を一層認めて貰ふやうにしていきたい。(3面)

引用後半、その真意を読みとることは思いの外難しいが、前半では大東亜共栄圏における日本の文学者の使命が肯定的・積極的に語られ、また、情報局との折りあいについても論及がみられた。ただし、ここには国策との折りあいの中で、文学至上主義を貫く企図も見え隠れしており、この時期にあつては危険な言表ともいえる。ならば、文学者はどのように文学を語ればいいのか。

特集「大東亜戦争と日本文化建設」(『新潮』S17.2)には3本の論文が寄せられており、そのいずれもが、大枠としては大東亜戦争-大東亜共栄圏を肯定-推進する支配的な言説となっている。

《生きてゐるうちにまだこんな嬉しい、こんな痛快な、こんな芽出たい目に遭へるとは思はなかつた》と感情を吐露する「今時戦争とその文化的意義」(『新潮』S17.2)の長興善郎は、《この数ヶ月と云はず、この一二年と云はず、我等の頭上に暗雲の如く蔽ひかぶさつてみた重苦しい憂鬱は、十二月八日の大詔煥発とともに雲散霧消した》(28頁)と、日中戦争の合理的な意味づけに苦しんでいた知識人(文学者)に典型的な、開放感にあふれた発言につづき、次のように述べていく。

今だからこそ云へるのであるが、我等は支那事変に於て、この因果的に避け得やうのなかつた悲しむべき兄弟喧嘩の形の矛盾感と、いつ果つべしとも見透し難いその帰趨の意味の何とない不明瞭感、張り合のピンと来ない気持のために国民の意気はどうも十分に揚がらなかつたといふのが本当の所であつた。[略]そこ[満洲事変以来の我国の動き]にはもつと世界文化史的な発展の意義が潜んでゐ乍ら、それをはつきり原理化することが我等には出来なかつたために、唯民族本能の発動として感じられたのであつた。かくて我等は無我夢中に闘ひたくない相手と闘ひ乍ら、一方その原理を^{プリンシプル}探してゐた。新しい世界観に立つ倫理である。そして八紘一宇といふ命題を樹て、そのために先づ大東亜共栄圏を建設せんとした。しかしそれは支那事変のみでは実現されず、又頑強な障害を控へたものであつた。かくて内外の事情機運相俟つて熟し、途に今次の対米・英の決戦となつたのである。(30頁)

こうして、大東亜戦争開戦後の現在から、過去遡及的に満洲事変、日中戦争を位置づけていく長興は、《大東亜共栄圏といふ語は、最早や抽象観念ではなくなつた》、《それだけでも海陸軍の世界史的業蹟の意味は偉大》だということを認めた上で、《しかしその勲功をして真の曠古の大業たらしむべき文化的使命は、我等の双肩に今後の懸案として課せられてゐる》(33頁)と、文学者による思想戦の重要性を強調していく。大政翼賛会文化部の初代副部長を務めた上泉秀信も「文化職能人の決意」(『新潮』S17.2)で、《国民が常に語り合つて来たことは、東亜新秩序の建設であり、大東亜共栄圏の確立であり、そして高度国防国家体制の整備について、国家と国民が「何を為すべきか」であつた》(34頁)と、現在へと至る帝国日本の来歴をたどりなおした後に、《皇軍破竹の進撃によつて、

共栄圏民族がヨーロッパの植民地的覇権を晩する道は開かれつつあるが、共栄圏内から欧米勢力を駆逐すれば、それで東亜民族は完全に解放され、新しい文化の建設がたちどころに成るといふやうな単純なものではない」として、次のように課題の困難さを示しつつ奮起を促していく。

欧米人が幾世紀にもわたって東亜民族の間に扶植した有形無形の文化を根こそぎ覆滅するなどといふことは容易に出来るものではない。欧米文化に優るところの強力で、且つ高雅な東亜文化の建設をもって、これに替へてゆかなければならない。[略]武力戦は謂はばその前哨戦でさへある。(35頁)

こうして上泉も、日本-大東亜共栄圏の最終目標達成のために、思想戦の重要性を強調する。この年の12月、新設された大日本言論報国会の理事を務めることになる秋山謙蔵も「新日本文化の創造」(『新潮』S17.2)で、《昭和六年の満洲事変を契機とする隠忍久しき日本の興起は、国際連盟機構を撃破し、遂に大東亜戦争によつて、その興隆を軌道に乗せた》と、帝国日本の来歴を現在から肯定的にたどりなおす。その上で、《アジアとは、もともと東方の日出る処と云ふ意味》だという秋山は、《「皇祖皇宗ノ神靈上二在リ」の大御言のもと、大東亜に新しい秩序を確立する大東亜戦争が、御稜威によつて、星の国アメリカと日くるる国イギリスを撃滅し去るのは、正に神意》だと捉え《伝統に基く日本の文化が創造される時、大東亜圏も亦自ら確立する》(41頁)のだと揚言する。

こうした思想戦への転回-展開は、文学場に関していえば日本文学報国会の設立(S17.5.26)が契機だったようにみえる。《大東亜戦争は単なる武力戦に止まらず、経済戦、宣伝戦、思想戦、文化戦の全面的な一大総合戦だとも言はれてゐる》ことにふれる「大東亜戦争と文学者の使命——日本文学報国会に寄す——」(『新潮』S17.7)の奥村喜和男は、《その思想戦、文化戦に特に関係の深い文学者が強力な一元団体を組織し、その総力を發揮されるといふことは、物的的のすべての力を戦争目的に集注する総力戦の立場から言つても、一応適切且つ必要な措置》だという¹¹。さらに奥村は、文学者-日本文学報国会の意義を、次のように高く評価してみせる。

現在の日本の政治が大東亜共栄圏の確立、世界維新の樹立といふ巨いなる使命を担つてをり、そして、この大東亜共栄圏の確立に於て、文化工作の使命がその政治工作大動脈をなしてゐることを思ひ合せる時、文学者の一元的団結たる『日本文学報国会』が日本の政治に及ぼす影響は寔に画期的なものがあると思ふ。(12頁)

この奥村の一文(講演録)を、《思想戦の重要な意義を説いた》(5頁)ものと評した無署名「新潮評論 国家目的の達成と文芸の使命」(『新潮』S17.7)では、《はにかみ勝ちな、弱々しい神経に多く支配され勝ちだった文学の職域人たちが、十二月八日を境として本然の血の叫びに眼覚め、自ら堂堂と愛国と名乗り、報国と銘打つた会の下に集結したといふその事実、会名そのものからして、実に空前のこと》(7頁)だと、文学者の奮起(変化)が高く評価される。その上で、同文は《今や文学の使命は、国家を離れて独立してゐるものではなく、文学の使命を挙げて、国家目的達成に協力しなければならないといふ自覚は、十二月八日以後のすべての文学者の到達してゐるところでなくてはならない》(8頁)と、本来自発的であるはずの《協力》を半ば強制していく言表でもある。

同誌同号の無署名「文壇余録」(『新潮』S17.7)では、《根本的には、時局の要請に基づく、文学者自身の自覚に依るものと言はねばなるまい》(34頁)と、含みのある修辞によって、日本文学報国会

設立が意味づけられていく。さらに同文では、次のように文学者の役割も説かれていく。

かなり長い間日本文学も、他の文化面と同じやうに、英米的なものの支配観念に従順であった。十二月八日以来それを敵性として、敢然立つて自主独往しなければならない。英米的イデオロギイを徹底的に排撃剪除して、「皇国の伝統と理想とを顕現する」日本文学を確立しなければならない。／即ち、この目的達成に向つて、文学者の総力を結集しなければならない。そして、そのことが決戦下に於いてやかましく言はれてゐるところの思想戦にも、勝利を得る道なのだと思ふ。(35頁)

こうして一連の文学者による思想戦をめぐる言説を検討してみれば、日本文学報国会を契機として、一体となった／一元化された文学者が自発的に／強制的に、国策に即して思想戦に係わっていく動向は明らかである。大東亜戦争－大東亜共栄圏の理念に即して、そこでの支配的な言説とは、米英(文化)を敵として対置し、日本－東亜の文化建設を進めるといふものだが、その際、修辞上の特徴としては、妥協なき徹底的な日本－大東亜文化の顕揚、米英文化の敵視－排除がみられた。《経済戦、思想戦にたいする注意が喚起され、殊に思想戦にたいする重要性について、その認識の徹底に、当局が努力をそそいで来てゐることは当然と言はねばならない》という無署名「新潮評論 思想戦と文学」(『新潮』S17.8)においても、次のような排他的な議論が展開されていた。

文化そのものの内容として、たとへ米英に発達したとしても、全然無色のものもあれば、米英的民族性の特色なり、米英的思想に依つて、どうしても色抜きすることが出来ないやうに特色づけられてゐる文化だつてあるはずである。我れ我れはその種の言葉その種の文化は、敵性と考へて断乎として排撃すべきである。「言葉」も「文化」も、同時に「思想」である場合があるからである。それを暢気に考へて、寛大らしく包擁力と襟度とを示して、「言葉くらゐいいではないか」「文化ならいいではないか」では、この思想戦のますます重要性を加へて来てゐる現段階以後に於いては、殊に許されないはずだと思ふ。(6頁)

ただし、こうした規範－理念があまねく言説に浸透していたわけでは、必ずしもない。そのことは、同誌同号の小特集「文学者と思想戦」によって、図らずも示される。長與善郎は「欧米文化に代へるに何を以て与ふるか」(『新潮』S17.8)で、《日本文化が世界文化の中に於て実に特異な発達経路をとり、日本人自身すら味解してゐる者が少い程一般人類に理解されにくいセンスの、それも極めて輸出向きでない渋いものであることを顧みれば顧みる程、我等はその正反対とも云ふべきアメリカ文化の代り役を勤めることの困難さを感じざるを得ない》と認めた上で、《我等がわが祖先が比較的怠つてゐた科学的方面を大に研学しなければならない》、《新たなる世界的日本思想、文学はその上に発展するであらう》(15頁)と、日本文化の前提に科学(西欧)を据えている¹²。もっとも、《先日結成された日本文学報国会は、差当つて銃後文芸運動その他の運動を開始し、現下の知識人に対して委請されてゐる思想戦の一端を分担遂行しようとする決意を表明してゐる》(17頁)と確認する新明正道「文学者の思想戦への態度について」(『新潮』S17.8)では、《文学者の思想戦への態度はその課題の把握の仕方如何によつて深浅いづれにも決定されるものと思ふべき》(19頁)だと、抽象化した言表－修辞によつて、ひたすらに文学者の態度－内面を問うことが自主的に求められてもいた。ならば、こうしたメタ言説ではなく、文学者自身の考えはどのようなものだったのか。

そこで、特集「文学者と思想戦」(『新潮』S17.10)の各論を、掲載順に検討してみよう。上司小剣「思想戦だけでは」では、《国内の思想を統一、鞏固にして、いはゆる一つの火の丸になつて外的に向ふのに役立つさせるのが、文学者の任務の大部分》(34頁)だと、思想への誘導-拡声機能が文学者の任務と捉えられている。《自他共に許す世界一流の文化、自他共に許す世界一流の思想を日本の血肉にすること、これが結局根本》だという新田潤は「より高い思想を」において、《文学者と思想戦対策といつても、結局私にはより高い思想をこの世紀に打ち建てることだといふふうにししか考へられない》(35頁)と述べ、抽象論を展開するにとどまっている。《私たちが当面の大敵として共産主義や英米の思想と果敢なる闘争を行はねばならないことは今日では万人の常識になつてゐる》という現状認識を示す河盛好蔵は、「文学者の良心を活かせ」で次のようにつづける。

立身出世主義、功利主義、厭戦思想の如き、戦争遂行上絶対に排撃しなければならないもろもろの悪思想は、共産主義や英米思想が我国に渡来する以前から既に根強く我国に存在してゐたことも私たちは否定することができない。従つて思想戦に於て敵に打ち克つためには、まづ身中の大敵を打倒しなければならないところに、思想戦の重大な意義と困難さがあるやうに思はれる。(35頁)

長與善郎「欧米文化に代へるに何を以て与ふるか」にも近い、こうした《身中の大敵》をめぐる認識は、しかし特集内では少数派である。《大東亜戦争は長期戦であり、その目標の深遠さは国民の一人として痛感するところ》だという徳永直は「私感」で、《私は自分に鞭うつて健全でまつたうな国民感情をたかめるに役だつやうな作品を書いてゆきたい》(36頁)と、新田潤同様、大状況をふまえた上で、抽象的に貢献を誓う。《あらゆる戦ひは、民族の世界観の戦ひとなつた時に初めて終結する》と断じる高橋義孝は「不断の武装」で、《精神的・文化的な労作に關する者の戦ひ》を《静かなる戦ひであると同時に、また不断の戦ひ》だとして、《不断の武装》を説く。岩上順一「文学者と思想戦対策について」では、《思想戦には思想をもつて対するばかりでなく、自由主義、独裁主義等にいかなる思想的体系に直面しても揺がぬ確固たる体系的な思想を建設する為の思索、探求、研究等々、一言ひかへれば、最も真実性ある世界観のための努力の中に、文学者の一つの大きな使命があることを自覚しなければならない》(37～38頁)と、揺るがぬ世界観の建設が課題とされている。これを文字通り素朴にいいかえたのが伊藤整「素朴な心を」で、伊藤は《文学者にとって思想上の戦ひは、外面にあるよりも、より多く内面にあると思ひます》(38頁)と、文学者の態度-内面を、自らこの思想戦に向けて積極的に順応させていこうとする。他にも、素朴な展開としては、《理窟だけでは本当に喧嘩も出来ぬやうに、戦争だつて出来ないと思ふ》と放言する宮内寒彌が、「思想戦・感情戦」において《思想戦だつてやはり、戦ひの一つである以上、先づ、腹立ちの情を離れて、存在するものとは思はれない》(38頁)、《思想戦の本質や意義を論ずることよりも、敵国に対する腹立ち、憎悪の感情を、明快率直に表示することの方が、文学者の仕事ではないか》(39頁)と、志賀直哉「シンガポール陥落」(『文藝』S17.3)を参照しながら米英に対する敵意をむきだしに示していく。

いずれの文学者も、思想戦それ自体を問い返すことはなく真摯に応答していたが、言表-修辞は多彩で、思想戦の理解やその深淺もそれぞれであった。してみれば、情報局の思想戦シフトはまだ定着してはならず、それゆえ文学者の発言の場として貴重な文芸誌『新潮』が、昭和17年に入ってから断続的に思想戦をとりあげてきたとみるべきなのかもしれない。というのも、文学者の発言はそれぞれであったにせよ、そのすべてが思想戦を意識して書かれた言表であることは間違いなく、

思想戦をめぐる言説が短期間で整序されていく昭和17年¹³に、思想戦というテーマに即して文章を書いて発表するという過程-体験自体が、文学者を思想戦へと動員していく役割を担っていたはずなのだから。そして、第一回大東亜文学者大会とは、その大がかりな加速装置でもあったのだ。

3. 第一回大東亜文学者大会をめぐる周辺言説分析

3-1

以上の同時代コンテクストをふまえた上で、改めて第一回大東亜文学者大会を組上に載せたい。

第一回大東亜文学者大会を主催した日本文学報国会とは、「社団法人 日本文学報国会定款」（『日本文学藝新聞』S17.6.1）において《日本文学者の総力を結集して、皇国の伝統と理想とを顕現する日本文学を確立し、皇道文化の宣揚に翼賛する》（1面）と定義された文学団体だが、「事務組織の確立」（『日本文学藝新聞』S17.6.15）において事務局長の久米正雄は《全文学者が誰も彼も思想戦の尖兵として団結して蹶起した。嬉しい事だ。》（3面）と述べており、その性格は明らかである。「文化建設へ大行進 雄渾多彩な八大企画」（『日本文学藝新聞』S17.8.1）の第一として掲げられたのが、「皇国文化宣揚大東亜文学者会議」であり、その概要は《大東亜共栄圏諸地域の代表的文学者約三十名を東京に招き、日本文化の真姿を認識せしめ且つ共栄圏文化の交流を図つて新しき東洋文化の建設に資せんとするもの》（1面）として示されていた。これが、第一回大東亜文学者大会へとかたちを整えられていくのだが、その具体的な概要が示された記事「“東亜文芸復興”の秋 満・支へ招待状発送」（『日本文学藝新聞』S17.10.1）においては、次のリード文が掲出されていた。

大東亜戦争完遂は、東亜民族が今日その双肩に課せられた歴史的命題である。今や米英の東洋に於ける邪悪極まる野心を一举に払拭し、彼等の武力、経済力、政治力を徹底的に撃滅し、燦然たる東亜個有の文化の復興にいと高き矜持を持つ意義深き秋といはねばならぬ。将に東亜文芸復興の秋は熟せりの感深きものがある。（1面）

大会開催直前の「第一回大東亜文学者大会号」（『日本文学藝新聞』S17.11.1）に掲載された「第一回大東亜文学者大会要綱」では、その「趣旨」として《東亜の天地より米英の侵略勢力と欺瞞的物質文化を撃攘し真に世界人類の平和を招来すべき道義的精神文化を樹立するため、日・満・華・蒙の代表的文学者と一堂に会し文学者として挺身協力すべき具体策を議せんとす》（2面）という文言が掲げられていた。もちろん、全国紙においても同様の言表が反復されていた。朝日新聞副社長で日本文学報国会・理事の下村海南は、「大会の意義」（『朝日新聞』S17.11.1）において、《大会の趣旨はわが国体の尊厳と皇国文化の真姿を認識せしめ、大東亜戦争遂行中の我国民生活の物心両面における揺ぎなき実情と実力を知らしめ、大東亜戦争の目的完遂に協力せしめんとするものであるが、そこに考へられる事は大東亜文芸の建設である、西洋文明によりて長く / \ その光を失つてみた大東亜文芸の復興といふ事である》（4面）と述べていた。

こうして、大東亜戦争-大東亜共栄圏の完遂を至上命題とする支配的な言説の中に配置された第一回大東亜文学者大会は、従って開催以前に言説の場に圧力がかけられていたことは、特に日本を除く地域からの参加者にとって、間違いない。それでも / \ それゆえに、支配的な言説を上書きしていこうとする反復のうちに、そこに亀裂を走らせる言表も散見されたことは、前稿でも確認した。

3-2

第一回大東亜文学者大会については、前後してメディア報道も展開された。

その1つとして注目したいのは、連載記事「日本国民に寄す 大東亜文学者大会に際して①～④」(『朝日新聞』S17.10.27夕～11.3夕)である。ここには、第一回大東亜文学者大会に来日-参加できなかった文学者からの寄稿もみられ、支配的な言説との距離を検討するに際して興味深い。初回「日本国民に寄す」(『朝日新聞』S17.10.27夕)に付されたリード文は、次の通りである。

十一月三日から開かれる大東亜文学者大会に参加する満洲国、中華民国の代表的文学者十八氏は一日打ちそろって入京する、これら代表は台湾、半島より加はる文学者ならびに主催側の日本文学報国会会員とともに膝を交へて大東亜戦目的完遂への協力方法、大東亜文芸建設などを中心に協議し、十日間に亙つて我が国体と皇国文化の高邁な姿や、戦下揺ぎなき我が国情を視察するが、この大会を前にして渡日する満、華の代表六氏と、準備の都合上今度の大会には参加出来ない南方ビルマ、マレー、ジャワ、仏印、比島諸地域の代表的文学者五氏よりそれ／＼「日本国民に寄す」一文を受け、連載することにした(1面)

「日本国民に寄す 大東亜文学者大会に際して①」(『朝日新聞』S17.10.27夕、1面)には、第一回大東亜文学者大会を《東亜共栄圏内諸国の文化向上の点から見て非常に重要性をもつ催し》と位置づける比島：アウナリオが「伝統を基に文化再生」をよせ、次のように言表している。

この文学者大会の主要目的は、如何にしてわれわれのアジア人としての性格の中に真の東洋文化の種を再生させるかといふことにあるかと思ふ、この東洋的性格はアメリカの支配の影響を受けて地中に埋められ、とゞまつてみたものである[略]たゞわれ／＼は愛の心をもつて新たにこれを培ひ、大東亜共栄圏の誕生とともにこれを再生させさへすればよいのであると信ずる、

こうして、アメリカを対置した《東洋文化》の《再生》が大東亜共栄圏へと直結されていく。また、華中：周化人は「文芸復興の光」で、同様の《東亜文化復興》に関して、科学を利用しながらも西欧思想を排し得た日本の特異性を指摘しながら、次のように言表していく。

日本の明治維新以後、東亜文芸復興の基礎と科学文明の効能とが建立され、西欧と同様に利用厚生を発生した、しかして東亜固有の道義精神はこれがためさらに光輝を発揚したのである、これこそ東亜文芸復興の明徴である、なほ最近の大東亜戦争による勝利によつて、いよ／＼西欧思想の毒素を肅清するにいたり、東亜の文化は勃然と興起したが、これは当然の趨勢といふべきである

その上で、周化人は第一回大東亜文学者大会の《最大の目的》を、《東亜文芸復興の任務を負つて、東亜各国文化界の巨人を一堂に会せしめ、東亜文芸の復興を協議し、東亜至上未曾有の記録を止めんとするにある》と見出し、そのことを言明してもいた。

「日本国民に寄す 大東亜文学者大会に際して②」(『朝日新聞』S17.10.28夕、1面)では馬来：ジョージ・イ・デ・シルバーが「偉なる精神の勝利へ」で、《あなたたちは心から東亜人の兄弟として感じさせてくれました》、《私達はいま日本のみの力によつて東亜の平和を確立し得るといふこと

を Knows」と、日本を中心とした大東亜共栄圏に期待を寄せつつ、東亜人としての一体化(八紘一宇)への理解を示している。それがさらに、満洲：古丁「日本は太陽」になると、《大東亜は一つであり、貴国は大東亜の太陽であり、我が満洲国の親の国》だと一体化の言説が反復され、《今や貴国は東亜の諸民族を率ゐて、米英撃滅の聖戦の必勝必成を期し、前線銃後を問はず、決戦をなされつつあり、大東亜における文学者は貴国の文学者を師と仰ぎ、そのところをこゝろとし、克くその責務を全うせざるべからず》、と日本を讃仰し、《今に日本語が東亜語となり、東亜文学就中日本文学が世界に光彩を放つであらう》(1面)と、大東亜共栄圏における言語の問題にまで論及していく。

「日本国民に寄す 大東亜文学者大会に際して③」(『朝日新聞』S17.10.31 夕、1面)においては、中支：許錫慶が「東亜を愛する熱情鼓舞」で《東亜堡衛の戦争は全東亜民族の協力を期待するもの》だとして大東亜戦争を肯定しながら、《東亜人がともに東亜を愛する熱情を鼓舞し、東亜人の団結力を強固ならしめるのは東亜の現段階における文芸および文化を担当するものにとって重要な任務である》(1面)だと、大東亜共栄圏における文学者の社会貢献の道筋が示されもした。

「日本国民に寄す 大東亜文学者大会に際して④」(『朝日新聞』S17.11.1 夕、1面)においては、周化人同様に《太平洋における西洋帝国主義に対する戦争は西洋自身のためでもある》というマレー：サラ・シ・バネが「東洋文化で西洋指導」で、《大日本の勝利と大東亜における新秩序の建設は東洋文化の勝利を意味し、そして東洋の思想と精神の真の理解へ西洋を導くであらう》という予示につづき、《かくて西洋もまた東洋と手を携へて新しい時代の光明へ進むことが出来るであらう》(1面)と、西洋を排除対象とせずに《東洋の思想と精神》で指導すべきだと言表している。《遠くビルマから日出づる国大日本の皆さんへ挨拶をおくることは、私の最も光栄とするところ》だと挨拶するビルマ：ウ・チ・モンは、「前途に光明」で、《我々のあるところは遠い、しかし我々の心は一センチも離れてゐないと思ふ》(1面)と、一体化した大東亜共栄圏の構成員を近さという比喩で語っていく。《われらは欧米思想の芟除をもつてその終極の目標とする》と断じる北支：沈啓牙は「携手挺身の秋」で、《今時大東亜戦争のさ中において、根本的な再検討をこれに加へ、その束縛の根をさつぱりと断ち切らねばならない》と言表して、《欧米思想》の排除を掲げると同時に、日中戦争に言及する。《中日両国をして今日の局面に立たしめた最大の責任は、かゝる深淵に喘いで、自己の真姿を忘れた過去の教育家と文学者にあると私は確信する》と責任を自国内に見出す沈は、《中日両国の文学者は、いよいよ徹底せる自覚のもとに、相互に犠牲の精神を振起し、大東亜文学の建設をめざして、固く携手挺身すべき》だと、大東亜共栄圏の構成員としての一体化(提携)を謳う。蒙古：小池秋羊は「望む日本の科学」で、《日本国諸氏に望む所のものは最も惜しみなく与へらるべき「日本の科学」であり「日本の芸術」》と述べ、西欧科学を摂取した先進国として日本を捉えている。

最終回「日本国民に寄す 大東亜文学者大会に際して⑤」(『朝日新聞』S17.11.3 夕、1面)では、北支：銭稻孫が「互ひの美を見出せ」で、タイトル通り《お互ひの美を発見することが肝腎でそれは感情移入からと思ひます》と、大上段の理念ではなく個別の人間関係-感情レベルでの交流を説いた。その変奏として、満洲国：爵青は「アジアを蔽ふ愛情」で《今度の聖戦によりて、日本はアジア大陸の南郭にある諸島嶼をも陸続きにさせた、アジアはまさに復興繁栄せんとしてゐる》現状にふれた上で、《アジア諸民族は米英の虐政下に喘ぐこと百年、今日では、到るところで日本民族の愛情を迎へんとしてゐる》と、米英を対置しながらアジアの旗手として日本の愛情を求めている。仏印：デルバン夫人は「認識と共感」で、《文学と芸術とはもと／＼科学に先立つて、時と所を異にする諸民族がお互ひに認識し合ふための絆であり、認識は理解へ導かれ、理解は共感を生む》と、大東亜共栄圏の構成員が、《文学と芸術》を通じて《理解》と《共感》を目指していくという、銭稻孫にも近し

い認識を示しており、そこに第一回大東亜文学者大会の意義を見出しているのだろう。

以上、一連の言表をまとめておけば、西欧-米英を対置して、日本を中心に東亜文化を復興させていく、といった枠組みが最大公約数といえそうで、これは大東亜共栄圏をめぐる支配的な言説とも共振している。また、これを支えるべく、大東亜共栄圏の構成員間の一体化が謳われ、その契機として第一回大東亜文学者大会が位置づけられ、あるいは構成員の連携-共感が目指されもした。他方、気になるのは西欧への言及、特に科学と関わらせた言表であった。そこでは、西欧科学を修得した日本(人)に指導性を認めるなど、西欧にまつわる要素を敵性として排することなく、むしろ日本を評価する際の要点とみなす傾向すらみられた。その時、日本は米英と戦うアジアの盟主ではあっても、実のところその地位は西欧科学の摂取に支えられている、ということになる。

こうしてみれば、結果的に総勢12名が寄稿した「日本国民に寄す」においては、第一回大東亜文学者大会を意義づけ、言表主体を大東亜共栄圏の構成員として主体化していくと同時に、少しく亀裂とも称すべき、支配的な言説から逸脱した言表も散見された。それは、思想戦の徹底という観点からは問題には違いないが、その綻びを積極的に覆っていくかのような新聞記事も散見された。

その1つは、来日した第一回大東亜文学者大会参加者を、日本の文学者が迎えて語らう「文学者大会出席者との会見記(全6回)」である。以下、記事名を具体的にあげておく。

- 富沢有為男「【1・2】バイコフ翁と語る(上・下)」(『読売新聞』S17.11.1,2、4面)
- 新居格「(3・4)錢稻孫氏と語る(上・下)」(『読売新聞』S17.11.3,5、4面)
- 片岡鐵兵「(4)周化人らと語る【上】」(『読売新聞』S17.11.6、4面)
- 片岡鐵兵「(完)龔・丁両氏と語る【下】」(『読売新聞』S17.11.7、4面)

もう1つは、同時期に『読売新聞』に掲載された、やはり日本国外からの参加者による「日本印象記(全6回)」である。初回「日本印象記」(『読売新聞』S17.11.2)のリード文を引いておく。

共栄圏の文学者を一堂に集めて三日から開く大東亜文学者大会を機に、新しい大東亜の文芸復興が絢爛の花を咲かせようとしてゐる、大会に出席する満洲国、中国、蒙古の各代表文学者はいづれも現在満華蒙三国にあつて文化建設の陣頭に立つ第一線文化人であり、日本と手を携へて新しい東方文化の合作に挺身する情熱に燃えてゐるが、長崎上陸以来その眼に戦ふ日本がどう映つたか——(3面)

こちらも、以下、記事名を具体的にあげておく。

- 中国代表：周化人「日本印象記(一)漲る必勝精神」(『読売新聞』S17.11.2、3面)
- 満洲国代表：バイコフ「日本印象記(二)静寂の底から万歳」(『読売新聞』S17.11.3、3面)
- 華北代表：尤炳圻「日本印象記(三)潤ひある規律の国」(『読売新聞』S17.11.4、3面)
- 華中代表：柳雨生「日本印象記(四)風光は心の現れ」(『読売新聞』S17.11.5、3面)
- 華中代表：予旦「日本印象記(五)秩序と礼儀に驚嘆」(『読売新聞』S17.11.6、3面)
- 中支代表：丁丁「日本印象記(六)凄烈な精神力」(『読売新聞』S17.11.7、3面)

両記事を並べてみると、バイコフ、周化人、丁丁が日本のメディアが注目したキーパーソンだと

目される¹⁴が、それは同時に第一回大東亜文学者大会（日本文学報国会）にとっての利用価値ということでもあろうし、当事者たちにとってみれば同大会への貢献度（の表象）ともいえるはずだ。

前者の記事では、各国代表と日本の文学者たちの親密さが、後者の記事では、海外からみた日本人・日本文化の特徴が、副題に示されたポイントにおいてアピールされている。いずれもが第一回大東亜文学者大会に前後する時期に連載されることで、儀式的な大会の様相とは別に、読者が想像-共感しやすい、人物-人間関係レベルでの大東亜共栄圏の縮図が示されていたといえよう。

3-3

第一回大東亜文学者大会は、1週間にわたった開催期間後も、言説を産出していく。それはたとえば、「文学者大会の成果【上・下】」（『読売新聞』S17.11.6,7）といったタイプのもので、それぞれの実感から第一回大東亜文学者大会の成果を謳いあげることで、支配的な言説に寄与していく。舟橋聖一は「作家同士の友情=本会議に参加して=」（『読売新聞』S17.11.7）で、同会を通じて思想戦の尖兵としての《責任》を内面化したことを、《僕は三日間とも出席したが、会議の雰囲気には刺戟されて、戦争中に於ける作家本然の責任といふやうなものを、痛感した》（4面）と言表している。

大東亜文学者大会に参加した龍瑛宗は、「新しき文化の樹立」（『文藝台湾』S17.12）において《アジア民族の動きは、つねに世界史的意義をもつてゐる》とした上で、次のように言表している。

米英の覇道のために、われわれは永い間、暗黒時代を過ぎなければならなかつた。[略]昭和十六年十二月八日、この日こそ、アジア復興の狼煙があげられたのである。アジアの偉大なる先覚国わが日本によつて、米英の勢力が駆逐されたのである。いまや、アジアの到るところで、米英没落の吊鐘が殷々とし鳴りひびいてゐる。狭い国土で資源の貧弱な日本が、所謂巨大なる持てる国である米英を打ち破つたのはじつに日本精神の勝利によるものである。／日本こそはアジアの希望であり、アジアの栄光であり、アジアを救ひ出した先駆者だつたのである。いまや日本の主唱のもとに、われらアジア十億の民族は、一となつて結合し、共によるこび、共に苦しんで、米英文化を否定して、新しいアジア文化の復興を宣言したのである。（14頁）

ここでも支配的な言説が反復されているのだが、こうした言表を余儀なくする程度に権力が機能していたことこそを問題化すべきであろう。「大東亜文学者会議 第一日の印象から」という企画に寄せられた長谷川如是閑「全東亜の結合へ」（『朝日新聞』S17.11.5）にも、次の言表がみられる。

当面の問題は、いふまでもなく、大東亜民族が日本を中心として、新しい世界史を創造せんとする、この偉大な歴史的戦争の目的を完遂するための、心理的および行動的『結合』の文学を大東亜文学としてうち立てることである。／そして、さらに永遠の課題としては、今まで東方の諸民族の間に欠けてゐた文化的脈絡を、新しい力によつて成り立たせることによつて、西欧人の西洋文明における如き、一系の大東亜文明を樹立発展せしめ、新しい時代の世界的中心文明たらしめるべき遠大の目的がある。（4面）

龍瑛宗、如是閑、いずれも米英-西洋にアジア-大東亜を対置させることで、大東亜文化に世界史的な意義を見出そうとしている。ここに、「大東亜文学者大会を終わりで」という企画に寄せられた、華中・草野心平による次の「期待以上の大成功」（『朝日新聞』S17.11.6）を並べてみよう。

東洋の歴史が始まって以来四千年、東洋の文学者達が、かうした形において一堂に会し、同じ目的に向って討議したことは一度もなかった。この事実は今後四千年、八千年の東洋文化史に残る事実であり全く画期的な企てであった。(4面)

いずれも大東亜文学者大会の意義を高く評価する点では類似した言表ながら、その位置づけを世界(史)/東洋(史)いずれに置くのかによって、異なる性質を帯びた言表とみなせるはずだ。

他にも、日本語の位置づけについても亀裂が見出される。「大東亜文学者会議 第一日の印象から」に寄せた「大きな拍手に感激」(『朝日新聞』S17.11.6)で、満洲国：バイコフは、「日本語がわからぬといふことを今日ほど悲しく残念に思ったことはない」としながらも、「しかし大アジア文学を、この大戦争の真たゞ中から打樹てようとする文学者の熱意は、国境をも、言葉といふ垣をも越えて私の腸に真直ぐ突刺つた」(4面)と述べ、日本語を介さない《熱意》の交通を言表していた。これに対して、濱田隼雄は「大会の印象」(『文藝台湾』S17.12)において、「私は痛切に思ふ。正しく、しかも美しく深い日本語を話し書く事が出来なければ、大東亜的信念を持ち得ない」(19頁)と言表して、日本語とイデオロギーとが不可分であることを言表している。もとより、日本語を問題化する局面は異なるのだが、それでも日本語の捉え方に差異があることは明らかだろう。

もともと、こうした亀裂-差異をことさら強調することも、一方では公平さを欠く。というのも、大枠としては支配的な言説を核として紡がれた言説が、共感をもたらしていく効果の方が大きかったようにみえるからだ。極端な例としては、古丁・和正華・丁丁・林房雄・香山光郎・張文環「日本の印象を語る座談会 上」(『朝日新聞』S17.11.7)における、次の丁丁の発言が確認できる。

支那事変が起つてから中国では、日本人といふものは非常に残酷であるといふふうに思つてみたんです。ところが、自分たちが和平運動を起して、汪先生といつしよに北京へ出てきて、更に日本の人達と交際する機会も得まして、初めて日本人の道義心の篤いこと、博愛、信義、さういふ氣質がハツキリ判つたんです。(4面)

ここには、日中間のアキレス腱であった日中戦争以降の印象が、当事者によって払拭されている。逆にいえば、第一回大東亜文学者大会とその関連行事をめぐる言説において、求められていたさまざまなポイントがそれぞれの立場の人物によって言表化されていく中、日中戦争もその1つだったということである。こうして、公式行事の内外で産出されていった第一回大東亜文学者大会関連言説は、大東亜戦争-大東亜共栄圏を支える支配的な言説を、亀裂をはらみつつも補完していった。その結果、福田清人が「我が戦争生活 文学報国会の日記」(『読売新聞』S17.11.17)で言明するように、「東亜保全、新文化建設のため、お互結集する情熱を表明した今度の大会は、対米英思想戦の大きな堡壘前哨戦の役割をつとめた」(4面)のであり、思想戦の実践は遂行されていく。

もとより、支配的な言説に亀裂を走らせる類いの言表もみられたが、いずれにしても東亜文芸復興を担うべき各エリアの文学者が、日本を盟主とした大東亜共栄圏を言祝ぐという一連のプロセスを体験したことになり、そのこと自体が思想戦にとって重要な成果でもあったはずだ。なぜなら、「思想戦の強化はたゞ抽象的、観念的な思想統制や目先々の思想宣伝ではない」と断じる「社説 戦争思想の指導」(『読売報知』S17.12.4)が示す通り、この時期においては《政治、経済、文化、国民生活各部門において真の総力戦を推進することがすなはち思想戦線の強化そのものにほかならない》(2面)のであり、第一回大東亜文学者大会とは文化における具体的な《部面》であったのだから。

また、同会を通じて日本人文学者は、大東亜戦争－大東亜共栄圏に貢献して社会的地位（社会性）を確保するための具体的な実践に関わり、思想戦の担い方を学ぶ機会ともなったはずなのだ。

4. おわりに——大東亜共栄圏文化をめぐる

第一回大東亜文学者大会で展開された思想戦を担う文学者の営為は、大東亜戦争－大東亜共栄圏の成就を目指して、戦時下の日本社会に配置されていく。聖紀書房編集部「後記」（『国民文学の構想』聖紀書房、S17）では、次のように第一回大東亜文学者大会の成果に論及がみられる。

第一回の大東亜文学者会議も予期以上の成功を収め、亜細亜的規模に於ける、文化戦争は着々と進捗してゐる。日本文壇の国際的地位の向上と確立、日本文学の亜細亜化といふやうな問題も、続々日程に登つて来るが、すべての基礎は、国民文学に求められなければならない。優秀な国民文学無くしては、日本文学は亜細亜文学の指導者となることはできないのである。（294頁）

実際、第一回大東亜文学者大会の成果として、重慶・米英向け弾劾問責文と枢軸側への感謝激励文の放送が閉会后すぐさま具現化し、大東亜文学賞も第二回大東亜文学者大会で銓衡・発表が行われていく。上に言及のある国民文学待望の声も、昭和10年代の国民文学論議の延長線上ながら、大東亜共栄圏を視野に収めたそれへとマイナー・チェンジをへながら展開されていった¹⁵。

第一回大東亜文学者大会に関わった文学者やその発言を、戦後の視座から一方的に裁断することが有意とは思えないが、同時代における態度表明の1つとして、身を賭して距離をとった中国文学者・竹内好にはふれておきたい。同会への参加を求められながらも拒否し、その経緯を「大東亜文学者大会について」（『中国文学』S17.11）に書き記した竹内は、結句で次のように述べていた。

昭和十七年某月某日某の会合があつて、日本文学報国会が主催したが、中国文学研究会は与らなかつたといふことを、その与らぬことが、現在においては、最もよい協力の方法であることを、百年後の日本文学のために、歴史に書き残して置きたいのである。（266頁）

ただし、引用箇所のみを以てその態度を評価するのは、危険でもある。同文にはそこに至るまでの経緯が詳述されていたばかりでなく、前後する時期の竹内には、問題含みの発言もみられるからだ。飯塚朗・橋本八男・竹内好・武田泰淳・奥野信太郎・實藤惠秀「大東亜文化建設の方図（座談会）」（『揚子江』S17.12）で竹内は、大東亜共栄圏文化のゆくえについて次のように述べていた。

日本文化を根幹とする大東亜共栄圏文化の建設と云ふことは僕等にとつては自明なことなんです。それが出発点でなければならないことは、十二月八日以来是は問題はないんだ。[略]今までは支那文化は支那文化として外から与へられた対象として議論されてゐた。併し日本を根幹とする世界史的な今後の動きと云ふものから言つたならば支那文化を包摂した意味での日本文化と云ふ立場がなければいかんぢやないか、我々の立場から言ふと...。（76頁）

もとより、時代的な限界は明らかなだが、ここでは竹内も、対米英戦開戦以後において《東亜共栄

《圏文化の建設》を自明の使命と捉えた上で、日支文化の位置づけ-編成を上のように考えていたのだ。ただし、理念的に大東亜共栄圏文化／東亜文芸復興を目指す言説が大量に産出されていく中で、その内実を具体的に考えようとする営為それ自体が、批評性を孕む状況があったようにも思われる。というのも、この論点を掘りさげていくと、小さからぬ困難-破綻にいきあたってしまうからだ。この論点をほりさげた、銭稻孫・張我群・古丁・長與善郎・片岡鐵兵・一戸務「大東亜作家文学談(座談会)」(『新潮』S17.12)を参照してみよう。まずは一戸の発言である。

西洋の方は西洋文化といふものがはつきり行はれてゐる。東洋には東洋的文化の融合がない。ところが、今回の大東亜文学者会議などが導火線になつて、東洋文芸の復興とか、或は東洋文化の確立といふやうなことが旗印しになつたけれども、実際問題として今後それが相当困難な道を踏んで行はねばならない。(40～41頁)

ここでは、《実際問題》としての東亜文芸復興の困難さ¹⁶が、その前提たる東洋文化の現状に即して指摘されている。その一端として、支那の日本理解について片岡と銭に次のやりとりもみられた。

片岡 [略]支那の理解の仕方は、日本の文学が含蓄する国際性を摂取しようとしたやうに思われます。日本を通して西洋文学を学ぶといふやうな風であつた。日本乃至、日本人そのものに対する興味ではなかつたといふ形跡が感じられます。

銭 これまで随分交流がありましたが、その交流といふものは、西洋のものを日本から撰つただけであつた。(43頁)

そうであれば、支那から見た日本とは、西洋の別名だということになり、それは控えめにいっても、古丁が《結局日本の文芸といふものは、日本古来の伝統を本に伝承されつつ、それと同時に世界の凡ゆるところの文学を撰り入れたのですから、日本文芸といふものは世界に比類ないもの》というところにとどまるはずで、にもかかわらず／それゆえに、つづけて《日本文学が中心になつて、その影響を受けて大東亜の文学は結局成長して行くといふやうに考へる》(48頁)と言明することになる。同様の議論は、一戸と張の間でも、次のように交わされていく。

一戸 東洋の諸国がヨーロッパ文化に害されたことは実に大きい。どんなに沁み込んだかといふことは何とも言ひやうがないほど大きい。

張 併し私に言はせると、さういふ段階も必要かと思ひます。

一戸 それは必要です。捨て去ることは容易でない。これを持つ東洋に還ることが必要だ。しかし、東洋的な目になるまでには相当の努力がある。(53頁)

ここでは、単なる東亜文芸復興の困難だけでなく、その東洋からはヨーロッパ文化を排除するどころか、それを保持した上での東洋文化の形成が目指されているのだ。してみれば、大東亜文化、ひいては日本文化の古層に、必要不可欠の要素として西欧文化が位置づけられていたことになる。

このことと関わるのが、科学をめぐる議論である。横光利一は第一回大東亜文学者大会・本会議において、大東亜各国／ヨーロッパを視野に収めた上で、科学の問題に次のように論及していた。

大東亜各国の文学者諸氏の過去の本当の苦しみは、科学との闘争であつたと私は思ひます。なほこれからも文学者は、この科学と闘争して行かなければならぬのぢやないか、寧ろ科学だけではなくて、科学精神とさへ闘争して、これを克服して行かなければ文学といふものは駄目になるのぢやないかと私は思ふのであります。〔略〕若し科学に負けますれば、ヨーロッパと同じやうになるのであります。昔から、アジアの精神といふものは、科学を克服して来たんぢやないかと思はれます。（引用は『文藝』S17.12、32頁）

西欧近代の科学を目指し、その移入に成功してきた日本を盟主とすることは、しかし言説上は西欧文化の徹底的な排除を前提として建設されようとしていく大東亜共栄圏文化に、危機／批評的な亀裂を産みもするが、しかしそれもすぐさま大東亜共栄圏の構成員によって封じられていく。

第一回大東亜文学者大会では、本会議後に日本各所の見学が行われたが、《今度の大東亜文学者大会でふかく印象に残つてゐる》(15頁)ものとして、その際の土浦海軍航空隊見学をあげる張文環は、「土浦海軍航空隊」(『文藝台湾』S17.12)を書き、そこで次のように言表していた。

科学の力に精神の力が加へられなければ、その科学の機能は大して役に立たないやうな事がわかつた。精神の力が電流のやうに発動機に通つたときに始めてつばさが自由に動き出すのだと云ふことを実地で見せてもらふことが出来た。そのために日本の空軍の強い所もわかり、敵を見つけ次第第一気に叩き潰せる精神もわかるのである。(16頁)

ここでは《科学の力》が論じられながら西欧文化には論及がみられず、それを生かし得る日本の《精神の力》が前景化され、科学をめぐる難問は精神論によって封じこめられていくのだ。

それでもなお、第一回大東亜文学者大会をめぐる言説が、一枚岩だったとはいえない。大東亜戦争-大東亜共栄圏(文化)をめぐるイデオロギーを迫認しながらも、しかしその欺瞞を囚らずも暴き出すかのような、武者小路実篤「大きな気魄で 共栄圏の人々の心を包め」(『朝日新聞』S17.11.6)を引いておく。《いろ／＼の事情で第一日きり参加出来なかつたが、中華民国や満洲や蒙疆の代表者の内には旧知の人や友人がゐて、それ等の人に再会出来たり、初めて逢へたりしたことは嬉しかつた》という武者小路は、大東亜共栄圏構成員との親交を深めつつも、次のようにつづけていた。

事にそれ等の人々が日本語が出来日本語で話が出来るのは、実にありがたく、感謝した。しかし日本の内にも遠来の客と、その言葉で話が出来る人が沢山ゐたし、それ等の人々の喜びは二倍にされたことと思ふ。その点で、僕のやうに日本語きり出来ないものは、少しすまない気がし、いゝ気にばかりなつてゐたくない。／日本は事実、米英に対する勝利者であり、大東亜を建設する責任者でもあり、実力者でもあるが、それだけ大きな気持になり、遠来の客に少しでも窮屈な感じを与へてはすまぬと思ふ。(4面)

帝国日本の恩恵に浴しながらも、島崎藤村はここで大東亜共栄圏における日本の覇権を相対化し、すまなさを言表していることになる。もとより、大東亜戦争を通じての大東亜共栄圏文化の建設は世界史的な使命であるはずなのだが、そして第一回大東亜文学者大会はそうした展開を支持する支配的な言説を多く産出する装置でもあつたが、ここにもまた亀裂がみられたことは銘記しておく。このように、同時代の視座から言説を検討することは、昭和10年代後半の文学場を短絡的な

イデオロギーによって裁断することなく、歴史的な動向を明るみに出すための必須の賭金である。

※本文・注ともに、同時代に即した資料は元号で、その他は西暦で書誌情報等を示した。

- 1 大久保明男「大東亜文学者会議と「満洲国」の「文学報国」——第一回大会と「満洲国」の動静」(『人文学報』2011.3)、105頁。
- 2 拙論「第一回大東亜文学者大会の修辞学——大東亜共栄圏言説の亀裂」(『神奈川大学アジア・レビュー』2018.3)。
- 3 大東亜共栄圏(思想)の来歴については、栄沢幸二『「大東亜共栄圏」の思想』(講談社現代新書、1995)参照。
- 4 申知瑛「不在・「通路」を演じる「朝鮮」文人たち——大東亜文学者大会(第一回～第三回)をめぐる——」(『朝鮮学報』2013.3)、50-51頁。
- 5 橋本雄一「大東亜」の時間、ネイティヴの時間——第二回大東亜文学者大会にある対重慶ディスクール」(『東京外国語大学論集』2012)、10頁。
- 6 橋本前掲論文には、《大会に参加した日本人作家たちは、「大東亜」というシステムと思考様式に対して衝突対立することは稀であった。[略]どうあっても自分自身が大東亜文学者大会の主人公＝主語であり、「参加した」自己と「参加させられた」自己とに分裂するような、大会が隠蔽した何か別の影響を大会参加によって被る客体＝目的語である局面は少なかつたと思われる。そのような局面はやはり、先の五つのゾーンからの参加者が多く担った》(2頁)という指摘があり、首肯すべきものだが、日本人作家による言説のすべてが支配的な言説に共振していたわけではない。
- 7 思想戦について、バラク・クシュナー／井形彬訳『思想戦 日本帝国のプロパガンダ』(明石書店、2016)他参照。五味渕典嗣『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』(共和国、2018)も併せて参照。
- 8 文学者の文化工作に関して、拙論「文学(者)による文化工作・建設戦——上田廣「黄塵」の意義」(永野善子編『帝国とナショナリズムの言説空間 国際比較と相互連携』お茶の水書房、2018)参照。
- 9 南方徴用については、神谷忠孝「南方徴用作家」(『人文科学論集』1984.2)、都築久義「作家の徴用」(『愛知淑徳大学論集』1986.3)、神谷忠孝「一九四〇年代文学への一視点」(『昭和文学研究』1986.7)、奥出健「徴用作家の戦争——ビルマ、マレー方面班を中心に——」(『近代文学研究』1991.5)、木村一信・芦田信和・上田博編『作家のアジア体験』(世界思想社、1992)、木村一信・神谷忠孝編『南方徴用作家—戦争と文学—』(世界思想社、1996)参照。
- 10 都築久義「日本文学報国会への道——戦時下の文学運動」(『愛知淑徳大学論集』1988.2)、100頁。
- 11 前後する時期に、奥村喜和男「大東亜戦争の思想戦的意義 心中の敵を撃滅せよ」(『読売新聞』S17.4.9、2面)などもある。
- 12 中谷武世「思想戦の再検討【上】観念と実生活、思想と生産」(『読売新聞』S17.11.11)にも、《私共は長年日本が宛として米英の生活文化の植民地であることを嘆いて来たものだが、大東亜戦争—大東亜戦争とはいふまでもなく米英に対する戦争である。一開始後の今日に於てもなほ、米英の生活原理、乃至は米英的世界観、人生観が日本の国民生活に根深く沁み込んで抜け切らぬ

事態を日常に見せつけられて屢々長大息を禁じ得ないのである。》(4面)という、同様の認識がみられる。

- 13 この年はシンポジウム「近代の超克」開催年でもある。「近代の超克」と思想戦の関わりについて、野口尚志「1942年9月—12月 〈思想戦〉の中の「花火」」(『太宰治スタディーズ』2016.6)参照。
- 14 バイコフの訪日記は、H・バイコフ／香川重信訳「日出づる国に旅して」(『文藝春秋』S18.2)として発表されている。
- 15 昭和10年代における国民文学論(言説)については、別稿にて分析を試みたい。
- 16 この論点については、張鈴「東亜文芸復興の夢——「東亜文芸復興」なる運動から日中戦争期の知識人の営みを見る」(『Juncture』2015.3)も参照。なお、同時代、議論の1年前には、樊仲雲「中国本位文化の建設」(『改造(六月時局版)』S16.6)に、《中国本位文化の建設は、たゞに中国の存亡の爲めのみでなくして東亜の存亡の爲であると、全アジアの民族は相共に起つて努力し、東方本位の文化を建設し、東方本位の文化を發揚せんことを》(109頁)といった言表がみられる。これに対し、同誌同号掲載の、林柏生・陳羣・傅式説・趙正平・孔憲鑑・周化人・樊仲雲・郭秀峯・草野心平・田中忠夫・今関壽麿・太田宇之助・清水薫三・山本實彦「現地座談会 日華文化溝流のために」(『改造(六月時局版)』S16.6)では、傅が《日本の文化といふものは、大部分はこれは中国から渡つたものであり、近代に於いては西洋からも撰取して居りますが、中国の文化と調合することが出来る文化は、私は日本の文化であると思ひます。日本の文化と中国の文化と調合して取入れたところの日本の文化、それを再び中国に輸入して、中国の新しい文化といふものを取入れ、或は中国の固有の文化と更にこゝで融合、調和させたものを拵へることが中国の新文化であり、東亜の新文化であり、世界の新文化になり得ると信じて居ります》(99頁)と発言している。